

清末留学生と漢文本『華夷変態』の刊行

(九州大学大学院) 郭 陽

〔要旨〕

『華夷変態』は、17世紀半ばから18世紀初頭にかけて長崎より江戸幕府に進呈された唐船風説書などを収載する海外情報集である。1906（明治39）年、反満革命思想の影響を受けた留日中国人士が、同書から明末清初における反清勢力の活動に関する史料を選録し、漢文本の『華夷変態』を東京で印行した。従来の研究では、この漢文本の書誌的な情報の言及に止まり、その出版経緯や内容構成について具体的に考察したものはなかった。そこで本稿では、江戸・明治期の日本における『華夷変態』の流布と影響を概観し、清末の留日中国学生の反満革命宣伝の一環としての、漢文本『華夷変態』の成立及びその歴史意義について検討する。

I. はじめに

『華夷変態』は、周知のように、江戸幕府の儒官であった林春勝（鷲峰1618-1680）・林信篤（鳳岡1645-1732）父子が、長崎からもたらされた唐船風説書などを編綴した海外情報集である。延宝2（1674）年、林春勝は三藩の乱の勃発を契機に、『華夷変態』の編纂に着手した⁽¹⁾。その第1巻には、明清交替期の中国情勢に関する華人海商の報告や、南明政権による「日本乞師」の書簡などが収められ⁽²⁾、第2～5巻には、おもに三藩の乱の時期の中国情報が収録されている。康熙20（1681）年に三藩の乱が終結してからも、林家では定例化した唐船風説書を集成して『華夷変態』の編纂を続け、最終的には享保2（1717）年に、『華夷変態』全35巻が成立した。

『華夷変態』の原本は、後に林家第8代当主の林衡（述斎1768-1841）によって幕府の紅葉山文庫に献じられ⁽³⁾、明治以降は内閣文庫（現国立公文書館）に移管されたため、内閣文庫本『華夷変態』（以下『内閣文庫本』と略称）と称されることとなる⁽⁴⁾。『内閣文庫本』が公開されることは

江戸時代を通じてなかったが、江戸後期に入り、その最初の5巻を抄録した写本が、民間にも多数流布している。これがいわゆる通行本『華夷変態』（以下『通行本』と略称）である⁽⁵⁾。さらに1906（明治39）年には、この『通行本』から、明末清初における南明政権や鄭氏勢力の抗清活動に関する史料を撰録した、活字本の『華夷変態』が、中国人留学生により東京で刊行されたのである。

『華夷変態』研究の先駆者である浦廉一氏は、この活字本を漢訳本『華夷変態』と称し、その書誌的事項と、刊行に至る経緯を略述している⁽⁶⁾。ただし同書に収められた記事の大部分は、後述のようにもともと漢文で書かれており、これを『漢訳本』と称するのは適切とはいえない。このため本稿では、同書を漢文本『華夷変態』（以下『漢文本』と略称）と称することにしたい。

なお中国でも、謝国楨氏が『漢文本』の序文を全文紹介し、浦氏の研究に依拠して、同書を含む『華夷変態』諸本の書誌的事項を略説している⁽⁷⁾。また最近では、中国語圏で初めて唐船風説書に関する专著を刊行した孫文氏が、やはり浦氏の研究に基づき、『漢文本』を紹介している。ただし孫

氏は、『漢文本』の底本が現存することを理由として、同書の史料的价值については否定的である⁽⁸⁾。それ以外にも、中国人研究者が『漢文本』所収の史料を引用することはあるが⁽⁹⁾、管見の限り、『漢文本』自体の成立過程や構成を検討した研究は見られない。

『漢文本』は刊行後すでに百年以上が経過しており、伝本もきわめて少ない⁽¹⁰⁾。また現在ではすでに完本『華夷変態』が活字本として刊行されているので、『漢文本』の記事自体には独自の史料的价值は認められない。しかし一方で、二十世紀初頭の東京で『漢文本』が刊行されたという事実は、清末の留日学生による革命運動史の一環として、興味深い問題を含んでいるのではないか。従来の研究では、浦氏がその書誌事項を略述するにとどまり、誰がいかなる目的で、どのような時代的背景のもとにこの『漢文本』を刊行したのか、その内容構成にはどのような特徴があるのか、といった問題については、十分な検討が行われていない。このため本稿では、まず江戸・明治期における『華夷変態』の流布とその影響を概観したうえで、『漢文本』出版の経過とその内容構成に検討を加え、さらにその時代的背景や意義についても論及することとしたい。

II. 江戸・明治期における『華夷変態』の流布と影響

『華夷変態』には、長崎に来航した華人商人から聴取した唐船風説書のほか、朝鮮や琉球から、対馬や薩摩を通じてもたらされた海外情報なども収録されている。三藩の乱に際して、清朝は「遷界令」と合わせて厳格な海禁を行ったため、長崎を訪れる華人は、鄭氏や三藩の支配地域から来航したものか、清朝の禁令を犯した密貿易者に限られていた⁽¹¹⁾。また朝鮮・琉球経由の情報も、おおむね三藩や鄭氏側に好意的であった⁽¹²⁾。このため幕府が入手した情報には、全体として三藩・鄭氏

側の視点に立ったものが多かった。林春勝も『華夷変態』の序文において、反清勢力に「若し夫れ夷の華に變ずる態を為す有らば、則ち縦え方域を異にするとも、又快ならずや」と期待を寄せていた⁽¹³⁾。

しかしその後、呉三桂が皇帝に即位した情報が伝えられると、こうした見方も一変する。延宝6(1678)年、林春勝は「呉鄭論」において、鄭成功とその日本人の母親について、「母子ともに日本武勇の風を存する」と賞賛する一方、呉三桂や鄭経に対しては、「忠義に非ずして篡奪」であり、「蜂蟻の類にすぎず、算えるに足りない」と酷評している⁽¹⁴⁾。最終的に清朝が三藩の乱を鎮圧すると、『華夷変態』の文面上でも、清朝は「韃靼」ではなく「大清」と称され、「韃靼康熙王」も「賢君康熙帝」と謳われるようになる⁽¹⁵⁾。

唐船風説書は、幕府要路の他に、対外通交や海防に関わる諸藩が参照できるのみであった⁽¹⁶⁾。『華夷変態』も林家に珍藏され、島原松平家などでその写本が作られるにとどまっていた。ただし同書の内容と共通する情報は、長崎の住民などを通じて、断片的ではあるが、民間にもひろく流布していた。近松門左衛門(1653-1725)は、鄭成功を主人公とした『国性爺後日合戦』(享保2<1717>年上演)や『唐船嘶今国性爺』(享保7<1722>年上演)の執筆に際して、そのような民間の風説を参照したと言われる⁽¹⁷⁾。これらの近松の浄瑠璃においては、清朝が「畜類同然の北狄」とされ、鄭成功母子の日本的な武勇が強調されるが、林春勝が三藩の頹勢を知って鄭経や呉三桂への評価を一変させたのとは異なり、両者も一貫して明朝の忠臣として描かれている。近松の一連の作品を通じて、民間でも明朝復興に尽力した忠臣としての鄭成功のイメージが定着していった。

また18世紀末ごろから、いわゆる海防論が活発となっていくが、その代表的な論者である林子平(1738-1793)は、清朝からの侵攻の恐れも説い

ている¹⁸。このような危機感も、清朝支配の起点となった、明清交替の史実への関心を高めたにちがいない。こうした時代背景の中で、唐船が舶載した多くの明清交替期の史書が、和刻本として刊行されている。『大清三朝事略』(寛政11(1799)刊)などの、官撰史書にもとづく文献のほか、中国では密かに写本として流布していた、『揚州十日記』・『嘉定屠城紀略』(文政13(1830)刊)のような、清軍の残虐行為を記録した史籍も刊行されている。さらに江戸後期には、日本でも清朝考証学の方法論が受容され、これらの立場の異なる史書を比較検討することにより、清朝の官撰史書における偏向を指摘する論者も現れるようになった¹⁹。

一方、幕府の書物奉行であった近藤重蔵(1771-1829)は、『外蕃通書』(文政元(1818)年に幕府に献納)を編纂するにあたり、南明や鄭氏が送った日本乞師の書簡などを、『華夷変態』から引用し²⁰、日本乞師を幕府の「御武威」の具現だとみなした²¹。また、水戸藩彰考館総裁であった川口長孺(1772-1835)は、藩主徳川斉脩(1797-1829)の意向を受けて鄭成功の事績を調べ、『華夷変態』を含む日中の関連史料を博搜して、『台湾鄭氏紀事』(文政11(1828)年序)を著している。『台湾鄭氏紀事』の成立とはほぼ同時期に、『通行本』も民間に流布するようになった²²。明清交替期の歴史への関心が高まるなか、何らかの経路で『内閣文庫本』の最初の5巻が筆写され流布していたと考えられる。

『台湾鄭氏紀事』においては、特に鄭芝龍の事績や日本乞師、及び三藩の乱に関する叙述に『華夷変態』からの引用が確認できる。その冒頭には、前述の林衡が序文を寄せ、日本人を母親に持つ鄭成功について、「成功も我が日本人なり」と記している²³。また川口の後任であった青山延于(1776-1843)も、同書に附した跋文において、鄭成功母子の忠烈を、「亦我が神州の風気の影響をうけ

たものに違いない」と称揚している²⁴。幕末の尊皇攘夷思想の中心地だった水戸藩では、夷狄である清朝の支配に抵抗した明朝の忠臣としての鄭成功像が、国粹主義的な観点とも結びついて強調されるようになったのである。

『台湾鄭氏紀事』は、鄭氏に関する代表的な史書として広く読まれ、それによって『華夷変態』の存在も知られるようになった。例えば、曲亭馬琴(1767-1848)は、小津桂窓(1804-1858)宛天保3(1832)年12月8日付の書簡において、『台湾鄭氏紀事』に類する書物として、『華夷変態』の借覧を申し入れている²⁵。そのころ、馬琴はこうした鄭氏関係の資料に基づき、『日本魂 鄭氏やまとたましひこくせんや異伝』と題する草双紙を執筆する構想を持っていた。ただしこの構想は、腹案のままで終わり、実際に執筆されることはなかった²⁶。

明治時代に入ると、台湾出兵や日清戦争などの時代的背景もあって、『華夷変態』や『外蕃通書』²⁷に収録された南明・鄭氏関係記事が、いわゆる「日本乞師」に関連して注目されるようになった²⁸。特に1890年代から大正時代にかけては、さまざまな論者が、幕府が南明政権や鄭氏勢力による「乞師」要請を拒絶したことを「鎖国退守」として批判し²⁹、あるいは幕府は「乞師」要請を断りながらも、実際には出兵の準備も進めていたと論じている³⁰。こうした「日本乞師」をめぐる議論は、「近代日本の対外膨張思想を反映したものにすぎない」と評価されているが³¹、一方で「日本乞師」に対する歴史的関心は、清朝による異民族支配の打倒をめざす革命運動にも結びつくことになった。次節では、明治後期に日本に留学した中国人学生による、『華夷変態』所収の明清交替関係記事の受容について、『漢文本』の出版経緯を通じて検討してみたい。

Ⅲ. 漢文本『華夷変態』出版の経緯

浦廉一氏は「華夷変態解題」において、『漢文本』

の書誌的事項につき、次のように概括している。

この書は編輯者日本小林叟発、発行者源光鑑、印刷所は日本東京神田区中猿樂四番地秀光社、発行日は黄帝紀元4604年3月1日となっている。編輯者を小林叟発としたのは、「華夷変態」巻1の林恕（春齋）の序に「林叟発題」とあるのをとったものの如く、発行者源光鑑は恐らく仮名とみる可く、発行所は事実と見るべく、発行期日黄帝紀元4604年は、辛亥（明治44年）革命に際しての革命軍の文牘中に、その年を「黄帝紀元4609年」とあるより推せば、まさに明治39年に当るのである。

更にこの書の刊行せらるるに至った由来を伝聞するに、辛亥革命前東京に留学した中国学生中には、滅清興漢を標榜する孫文一派の革命思想に共鳴する者多く、彼等が一たびこの「華夷変態」を閲読するに及び、明清革命に際し日本朝野が明朝に対し深甚の同情を寄せたのを知り、これを現状と対比して深く感ずる所があり、以て歴史的回顧を行い、漢族奮起の資とするにあらんと云われている³²。

また謝国楨氏も、「漢訳本は不分巻の刊本であり、辛亥革命の時に刊行されており、蓋し吾国の、日本に留学した同盟会中の人士が、革命を鼓吹するために作ったものである」と述べている³³。『漢文本』の基礎的な書誌事項や刊行の背景は、概ね浦氏が概括する通りであるが、ここではその刊行の背景を、同書の奥付を手がかりとして、当時の東京における中国人留学生社会の動向のなかにおいて、より具体的に考察してみたい。

まず奥付に記される「黄帝紀元4604年」という刊行年について、浦氏は革命軍の文書に付される黄帝紀年を以て、この4604年を西暦1906年と逆算している。中国旧来の紀年法を専制の象徴として排斥し、「孔子紀年」、「黄帝紀年」、「亡国紀年」、「共和紀年」などの新しい「時間システム」の創出によって人心一新を図ろうとする構想は、日清戦争

後から中国において活発に提起されていた。なかでも黄帝を漢民族の歴史の始原とみなす「黄帝紀年」は、後に革命派の共通の紀年法として定着していった³⁴。

但し、一概に「黄帝紀年」といっても、その始年については諸説があった³⁵。同時期に東京で発行されていた『民報』³⁶の奥付では、「中国開国紀元」³⁷とともに、西暦・日本年号・清朝年号も併記されていた。これに対し『漢文本』では、「黄帝紀年」だけで、西暦などは併記されていない。『漢文本』における「黄帝紀年」は、宋教仁が『貳拾世紀之支那』において提唱した、西暦1905年を黄帝即位4603年とする紀年法によると考えられるため³⁸、同書の刊行年は、やはり浦氏の指摘するように、西暦1906年であろう。

この1906年は、あたかも清末留日中国学生の数が最高を記録した年であった。日露戦争や科挙制度の停止などの影響もあり、1903（明治36・光緒29）年には約1300人だった留日中国人は、1904（明治37・光緒30）年には2400人に増加し、さらに1905（明治38・光緒31）年には約8000人、1906（明治39・光緒32）年に至っては約1万2000人となっている³⁹。留日中国学生の増加にともない、かれらによる出版活動も盛んになっていった。たとえば『民報』第5号（1906年6月30日出版）に掲載された田尻洋紙店の広告には、「大中華国留学生の諸儒・碩彦の弊国に居る者は一万数千人におよび、貴国の文明の伸張を図る著作は、月ごとに出版され、その量は数えきれない」と記している。

1905年には、東京で結成された全国的な革命組織である中国同盟会も、直ちにその機関誌として『民報』を創刊した。以降、『民報』は『新民叢報』との論争を通じて、立憲・保皇派の康有為や梁啓超に共感した者をも革命支持に転向させ⁴⁰、翌年にはすでに在日留学生の半分が、同盟会に加入していたといわれる⁴¹。『漢文本』が発行された1906年はまさに革命思想が留日中国学生界に急速

に拡大する時期だったのである。

『漢文本』の奥付には、黄帝紀年による印刷・発行の年月日につづいて、編輯者として「日本小林叟発」、発行者として「源光鑑」という名義が記されている。まず「小林叟発」については、浦氏も指摘するように、『華夷変態』冒頭の林春勝の序における、「林叟発題」という署名から取ったと考えられる。「源光鑑」については未詳であるが、おそらく中国人留学生による仮名であろう⁴²。

さらに奥付では、印刷人として東京神田区中猿樂四番地の「藤澤外吉」、印刷所として同じ住所の「秀光社」を記している。この印刷者・印刷所は実在しており、当時の中国留学生に関する史料にも関連する記事が少なくない。上述のように、20世紀初頭には大量の中国留学生が東京に流入したが、彼らの多くは大学や学校の集中する地域に居住しており、その中心地である神田には、中国人留学生を顧客とした事業も発達していた⁴³。

特に留学生を対象に、印刷業務を引き受けた印刷所としては、浅草の東京並木活版所・牛込神楽坂の翔鸞社・牛込市ケ谷の秀英舎第一工場・神田の愛善社・秀光社などがあった⁴⁴。そのなかでも秀光社は『貳拾世紀之支那』・『民報』・『夏声』・『醒回篇』及び『秋瑾詩詞』・章太炎の『国故論衡』などの革命派の書籍の印刷所として知られている。『民報』の各号に掲載される秀光社の広告によれば、同社は鉛印・石印・グラビア印刷などに対応する設備を擁し、すぐれた印刷技術により、中国人留学生のために印刷業務を引き受けることを謳っている。同盟会の創始者の一人である宋教仁の日記⁴⁵にも、秀光社に関する記述が少なくない。

それによれば、まず1905（開国紀元4603）年1月2日の条に、宋教仁らによる雑誌の創刊計画が初めて記されている⁴⁶。その準備作業として、彼らは秀英舎工場、小川印刷屋にそれぞれ雑誌の章程、原稿用紙と領収書の印刷を依頼した⁴⁷。後に

『貳拾世紀之支那』と命名されたこの雑誌は、やはり秀英舎の印刷により、1905年6月25日付で第1号が発行されたのである⁴⁸。

さらに8月20日には、同盟会が結成され、『貳拾世紀之支那』がその機関誌と定められたが、27日には秀光社から届いた同誌が巡査に押収されたと記されている⁴⁹。この記述により、『貳拾世紀之支那』第2号の印刷社は、秀英舎から秀光社へと変更されていたことが分かる。ただし同誌はこの第2号で停刊となり、9月21日には、新たに同盟会の機関誌として、『民報』を発刊することになった⁵⁰。その後、『民報』は1908（明治41）年10月に日本政府によって発禁処分になるまで、秀光社で印刷されている。

宋教仁の日記は1905年9月21日から三ヶ月間あまり記述がとだえているが⁵¹、1906（開国紀元4604）年1月1日から日記の記述が再開されると、秀光社に関する記述が俄に増している。当年の1月中に、宋が秀光社を訪れたのは13回にのぼり、ほぼ隔日に原稿の交付、出版の相談、決算などのため、秀光社に通っている。しかし、このときから、宋はすでに民報社を離れることを考えており⁵²、1月27日には庶務幹事の役を宋海南に引き渡した⁵³。その後、宋教仁は秀光社を訪れることが少なくなっている。

『民報』は、最初はその印刷者が末永節となっているが⁵⁴、1906年10月以降からは、奥付に表示される印刷者が藤澤外吉へと変わっている⁵⁵。宋教仁の日記では、秀光社主人の藤澤外吉との交渉もしばしば記されており⁵⁶、藤澤は『民報』の印刷業務の必要上、革命派の中国留学生と頻りに連絡をとっていたことが確認できる。

なお、清末留日中国学生の生活状況を描写した、平江不肖生（向愷然）の章回体小説『留東外史続集』にも、秀光社についての記述がある。それによれば、湖南省の数人の留日学生が同郷会においてある留学生の非行を糾弾するため、彼の行為を

風刺する「竹枝詞」を作って同郷に配布した。その「竹枝詞」作成の発案に当たって、留学生らが選んだ印刷所が、まさに秀光社とされているのである。作中の学生らは、秀光社を選んだ理由として、「私は秀光社の番頭と、書籍の印刷をめぐって交渉したことがあり、早くて経費も安い」と述べている⁵⁷⁾。総じて中国人留学生のなかで、秀光社は定評のある印刷所だったようだ。

なお宋教仁の1906年9月17日の日記には、「十時、本屋にいて『台湾鄭氏紀事』一冊を買った。日支両国の諸書を参考にして鄭氏の顛末をひじょうに詳しく記している」という記述がある⁵⁸⁾。前述のように、『台湾鄭氏紀事』は、川口長孺が水戸藩主の指示により、鄭成功一族の興亡について編纂した史書であり、幕末から鄭氏に関する代表的な書籍として広く読まれていた。同書では、引用した書目が詳細に付記されており、南明や鄭氏による「日本乞師」などに関する叙述は、『華夷変態』に依拠していたことがわかる。

宋教仁が『台湾鄭氏紀事』を購入したのは、1906年3月に『漢文本』が刊行された半年後であった。彼はまず漢文本によって『華夷変態』に接し、そこから『台湾鄭氏紀事』にも関心を抱いた可能性がある。一方で漢文本刊行の経緯として、留日学生がまず幕末から刊本として流布していた『台湾鄭氏紀事』を通じて、『通行本』の存在を知り、そこから主に漢文史料を抜粋して、『漢文本』を編纂・刊行した可能性も想定できるだろう。

IV. 漢文本『華夷変態』の構成と内容改変

浦廉一氏は『漢文本』の内容構成について「(通行本)の第1巻より12件、第2巻より2件、第3巻より2件、第4巻より2件、合計18件を撰録したものである」と述べている。また、『漢文本』の18件の記事に対応する、『通行本』の出典をも列記している⁵⁹⁾。『漢文本』の目録には、17節の表題が挙げられ、「序」と合わせれば、18件の記

事となるように見える。但し、実際に各節の内容を確認すると、第10節「咨琉球国王文」のように、同じ表題の下に、『通行本』の巻1と巻4から引用された六つの記事を一括して収録している場合もあるので、浦氏が述べる両書の対応関係は、必ずしも適切とはいえない。以下、本節では、両書の対応関係を再整理しながら⁶⁰⁾、『漢文本』の目録順に従い、同書の内容を概観してみたい。論述の便宜のため、各節の題目には通し番号を附した。

『漢文本』の最初には、『通行本』から転載した、①「華夷変態序」が掲げられている。上述のように、林春勝はこの序文で清朝を「韃虜」と称し、呉三桂や鄭経などによる中華の復興に期待を示していた。ただし『漢文本』では、『通行本』の序文をそのまま収録したわけではなく、編者が意図的にその文章表現に手を加えた部分も少なくない。たとえば日本に明清交替の情報が十分に伝わらなかったことを、『通行本』序文では「雲海は渺茫として、その始末を詳らかにせず」と記すが、『漢文本』序文では、「吾が国と唐土は僅かに一衣帯水を隔つも、交通は甚だしくは頻繁ならず」と書き換えている。文意自体は変わらないが、中国人の読者により理解しやすい表現に改訂したのだろう。同じような文章表現の改訂箇所は他にも多い。

さらに『通行本』序文の文章表現を、大きく改変した箇所もある。たとえば『通行本』序文において、明清交替を「華の夷に変わるの態なり」と述べた箇所が、『漢文本』序文では、「朱明を促滅し、神器を盗窃す。是に天下に君たる者は夷なり、華に非ざるなり。変なり、常に非ざるなり」と大きく増補されている。清朝の中国征服が、華夷秩序に反した異常事態であるという認識がより強調されているのである。清朝を「朱家の大明を滅ぼし、天下を盗んだ夷である」とする表現は、明らかに留日学生の民族主義的な革命思想を、明清交替の歴史状況に託して表現したものである。

さらに、『通行本』序文には存在しない文章を書き加えた箇所もある。たとえば林春勝が『華夷変態』を編纂した意図について、『漢文本』では、「以て有明亡国の一段の実録と作し、^{ねが}庶わくば春秋大義の以て昭らかなるを得んことを」云々という一文が挿入され、華夷秩序にもとづき「春秋大義」を明らかにすることが強調されている。また鄭氏が三藩の乱に呼応したことについても、「其の精誠は已に以て天地を格^{たが}して鬼神を泣かしむに足る」と、その明朝復興への誠心を強調する一節が加えられた。一方で、『通行本』では「頃ろ吳・鄭は各省に檄し、恢復之挙有ると聞く」と、吳三桂と鄭経が、ともに明朝復興の檄を飛ばしたと記すのに対し、『漢文本』では「頃ろ鄭氏は各省に檄し」と、吳三桂の名が削除されている。これは吳三桂が清朝を中国内地に引き入れ、後には明朝の永曆帝を殺害したことにより、革命派であった汪精衛が「狗彘に若かず」と評したように⁶⁰、否定的に評価されていたためであろう。

序文に続いて、『通行本』第3巻から、明朝の遺民であった何備甫による②「大明論」と、長崎に来航した林上珍による③「満清有国論」が収録されている。このうち「大明論」では、明朝の歴史を略述したうえで、鄭成功の清朝に対する抗戦と、その急死までの経過を記す。ただし『漢文本』では、『通行本』の原文の末尾にある「興亡・得失は、皆な天命なり」という一句が削除されている。一方「満清有国論」では、明朝は夷狄の「偽朝」である清朝に倒されたものの、今や中国各地で反乱が発生しており、無道な「偽朝」はまもなく滅亡する「天命」にあると主張する。この文章についても、『漢文本』では『通行本』の原文にある、「庸臣に罪有るも、亦た未だ始めより天に非ざるはなし」という一文を、「其の亡ぶや、天命と曰うと雖も、亦た人事にも由るなり」と改編している。いずれも原文では、明朝の滅亡を天命の喪失に帰しているのに対し、『漢文本』では、そうし

た表現を削除し、あるいは「人事」を重視した表現に変えているのである。清末の留日学生にとって、革命とはむしろ伝統的な「天命の交替」による易姓革命ではありえず、異民族支配の打倒、さらには帝制自体の打倒という、民族・民権主義の実現をめざすものであった。このことが明清交替を「天命」に帰すような伝統的観念が、削除・改編された原因であろう。

ついで『通行本』第2巻から、④「吳三桂檄文」と⑤「鄭経檄文」が収録されている。いずれも清朝を「狡虜」や「夷虜」と称して、その暴虐を痛撃し、明朝復興を目指す挙兵の正当性を訴える内容である。その後にはいずれも『通行本』第1巻から、明清交替期の史実に関する、⑥「李闖覆史軍門書」、⑦「崇禎賓天弘光嗣位」、⑧「朝鮮東萊府使談」、および南明政権の日本乞師に関する、⑨「崔芝致日本乞援兵書」、⑩「長崎王談」を収録している。さらに⑪「咨琉球国王文」が続くが、ここでは『通行本』第1巻所収の、南明政権が琉球に送った3通の書簡と、同書第4巻所収の、福建の耿精忠が琉球に送った3通の書簡が、一項目としてまとめられている。

つづく⑫「大明兵乱伝聞」は、『通行本』第1巻所収の、入関した清朝に抗争し続けていた在地勢力の状況、及び鄭芝龍による日本乞師に関する報告であるが、そのうち鄭芝龍の事跡について、『漢文本』のなかでは例外的に、編者が日本語の原文を漢文に訳したものである。⑬「魯王諭琉球国王文」と⑭「鄭成功致日本文」も、ともに第1巻から取られている。なお『通行本』の⑭「鄭成功致日本文」の末尾では、鄭成功の南京攻撃や台湾占領、彼の病死と鄭経による継承などの史実を、和文により簡明に解説しているが、『漢文本』でも、その和文を漢訳して附載している。『漢文本』の所収記事のうち、日本語から漢文に訳出されたものは、上述の⑫「大明兵乱伝聞」の一部と、この附記だけである。それらの原文は、いずれも『華

夷変態』の大部分を占める「候文」ではなく、漢文調の文語文であり、日本語を習得した留日中国学生であれば容易に漢文訳できるものであった⁶²。

さらに同じく『通行本』第1巻から、⑮「鄭経致長崎王殿下書」・⑯「鄭鳴駿致長崎王殿下書」を収める。これらは鄭氏勢力の財政を管理していた鄭泰が、かつて長崎唐通事に預けた銀の返還をめぐって、鄭経と鄭鳴駿（鄭泰の遺族）が争った際に、双方が長崎奉行に訴え出た書簡である。このうち⑯「鄭鳴駿致長崎王殿下書」の後には、『漢文本』の編者によって、『通行本』の原文にはない論評が附されており、鄭経が「韃靼」に通じた鄭泰を殺害したことを「大義滅親」と称揚する一方、清朝に投降した鄭鳴駿を、明朝の「叛臣」、鄭氏の「不肖子」であり、「良心喪尽」と酷評している。

そして『漢文本』の最後には、『通行本』第4巻から、三藩の乱における清朝と反乱勢力の支配圏を図示した⑰「明清分據地域」と、やはり三藩の乱の情勢を伝える⑱「明臣答日本某執政書」が収録されている。

全体として、序文と17項目からなる『漢文本』は、『通行本』第1巻からは17件、第2巻・第3巻から各2件、第4巻から5件、計26件の記事を抄録して構成されていた。『通行本』では、序文に「其の次第を叙し、冊子として録す」とあるように、各項目は年代順に配列されている。これに対し、『漢文本』では『通行本』の配列を踏襲せず、各巻から選択した記事を、独自に配置しているのである。

上述のように、『漢文本』における記事の配列には、同書の刊行の目的に沿った、編者による明確な意図が認められる。まず編者が大幅に改変した序文につづき、冒頭に満洲支配を痛烈に批判した、長文の「大明論」や「満清有国論」が掲げられている。この二編が、『漢文本』全体の基調を

明示する導論といえよう。それに続いて、清朝支配への反攻を呼びかける、鄭経や呉三桂の檄文を配置する。その後は、明清交替にともなう清軍の残虐行為や、各地の反清勢力の動向を伝える記事が続き、さらに日本乞師や三藩の乱の動向に関する記事が、おおむね時系列に沿って収められている。全体として、明朝遺民の議論や、清朝排撃の檄文を冒頭に配置することによって、『漢文本』では、清朝の中国支配の不当性を強調し、それに対する決起を唱導するような構成となっているのである。

『華夷変態』においては、上述のように、清朝中国ではすでに散逸し、あるいは抹殺された、反清勢力側が発した文書・書簡・檄文などが収録されている。そのなかでも『漢文本』が選録した史料は、清朝統治の無道や暴虐を強く批判するものが多く、日本や琉球に援兵や軍需品の提供を求め、共同して清朝に対抗することを呼びかけた記事も少なくない。興中会による革命運動の有力な唱導者であった馮自由は、清朝支配の打倒をめざす宣伝工作について、「興中会の初期には、文人墨客が極めて不足していた。所用の宣伝材料も、僅かに『揚州十日記』・『嘉定屠城記』、及び『明夷待訪録』から選録した『原君』・『原臣』などの単行本数種しかなかった」⁶³と述べている。清朝支配の批判に利用しうる、明清交替期の同時代的史料はきわめて乏しかったのである。革命派の留日学生が、『華夷変態』に収録された、清朝統治の正当性を否定し中華の復興を呼びかけた記事を、有力な宣伝材料として注目したことは十分に理解できよう。

また『漢文本』では、『通行本』の語句を改変した箇所も少なくない。それらの多くは、日本式漢文をより整った漢文に改めるなど、技術的な改訂であるが、文章表現を清朝支配の苛酷さや不当性をより強調するように改めた箇所も散見する。こうした文意上の改変も、『漢文本』が、清朝支

配に対する革命運動に資するために編纂されたことを明示している。

V. 結びに代えて——『漢文本』と留日学生

本稿では、まず江戸時代から明治期にいたる『華夷変態』の流布とその影響を概観し、ついで『漢文本』の奥書を手がかりに、留日中国人学生が同書を印行した事実を再確認した。さらに『漢文本』の構成と内容を、『通行本』と対照して検討し、前者が清朝に対する革命運動の宣伝活動の一環として刊行されたものであることを示した。

日清戦争以降、伝統的な「天下」観にもとづく王朝体制に対し、近代的な「国家」の構築をめざす思想が浸透していくとともに、満洲支配の打倒をめざす民族主義も台頭していった。こうした動向は、特に義和団の乱以降は、満州人王朝である清朝を打倒し、漢民族による国民国家の建設をめざす革命運動として発展していく⁶⁴。異民族王朝の排除と漢民族の国民国家建設を唱導する上で、清朝支配の起点となった、明清交替の歴史的事実に対する関心も高まっていった。とりわけ鄭成功を中心とする反清勢力の事績は、漢民族を排滿革命の方向に結集させるための、重要な宣伝材料として注目されることになる。章太炎(1869-1936)が、1902(明治35)年に「支那亡国二百四十二年記念会」を發起し、漢民族の民族的敵愾心を喚起しようとしたことは、その典型的な事例である⁶⁵。

しかし中国本土には、清朝の禁書政策により、明清交替期の歴史状況を、反清勢力の視点から叙述する文献は乏しかった。『華夷変態』も、鄭氏などの反清勢力に関する、中国本土には伝存しない多くの史料を含む歴史的文献として注目され、『通行本』にもとづき、その記事を取捨選択し、記事配列の再編や、文章の部分的改変も加えて、より異民族支配に対する弾劾と、民族主義の鼓舞という目的に合致する形に再編集したテキスト

が、『漢文本』だったのである。

もちろん、当時の革命派人士は、単なる伝統的な王朝交替史観により、異民族支配の打倒をめざす民族主義を唱導したわけではない。彼らの掲げる民族主義は、漢民族を中心とする、近代的な国民国家の建設という理念に向かいつつあった。代表的な議論として、鄒容(1885-1905)は『革命軍』(1903)において⁶⁶、彼らの革命活動はルソーなどの民権・共和思想の実践であると同時に、鄭成功・張煌言の反清事業を受け継いだものであると表明している。一方、中国人留学生在が東京で発刊した『浙江潮』でも、その第2号から、日本の関係資料も参照して、「中国愛国者鄭成功伝」が連載されており、西洋の自由民権思想を導入する前に、まず鄭成功の反清活動に表れた民族意識を普及させるべきだと説いている⁶⁷。鄭成功や南明政権の忠臣の事績は、広範な民衆の民族主義を喚起するうえで、特に効果的な宣伝材料とみなされていた。たとえば、鄭成功を秘密結社である天地会の創建者とし、彼を「反清復明」の歴史的シンボルとして位置づけている動きも見られる⁶⁸。

1905年には、興中会・華興会・光復会が合同して、中国同盟会が結成される⁶⁹。ただし同盟会の内部では、革命の理念や方向性について、なお路線の違いも大きかった⁷⁰。同盟会員であった北一輝によれば⁷¹、革命派のなかには、「世界主義的な広東派(興中会)」、「排外的なる国家思想」をもつ湖南派(華興会)、さらに「明の復興を唱へたる」浙江派(光復会)があったとされる。北の認識は各派の相違を単純化しているきらいがあり、特に孫文に対する評価は客観的とはいえないが、孫文一派には「外力依存主義」的傾向があったことは確かだという⁷²。また実際には、華興会系・光復会系のメンバーも、欧米と対抗する限りにおいては、日本の役割に期待していたといわれる⁷³。

このような路線の相違はあっても、排滿種族革命をめざす民族主義という理念は、革命派全体に

共有されており⁷⁴⁾、鄭成功や南明政権の忠臣は、清朝に対する抵抗のシンボルとして英雄視されていた。彼らの抵抗を伝える『華夷変態』の記事は、排満による民族革命の先駆的事績として、民族主義的傾向の強い浙江派や湖南派からは、特に強い共鳴を得たことは当然だろう。同時に鄭氏勢力による日本乞師などの事績は、広東派の国際主義的な傾向にもアピールする側面をもっていたと思われる。

実際に『民報』では、日本乞師を含む鄭成功の反清活動を題材とした脚本が1906年11月から連載されている⁷⁵⁾。しかし、明治政府は同盟会の革命運動に対する抑圧を強め、1908年には『民報』も発禁処分を受けている。『民報』の発禁に際して、章太炎はやはり明清交替期の史実を引いて、『民報』の立論を、日本乞師のために来航した朱舜水の事跡にたとえ、日本政府の理解を求めている⁷⁶⁾。

1911年の辛亥革命により、清朝支配が打倒され、異民族支配の排除が一応の成功を見ると、排満をスローガンとする従来の民族主義はひとまずその役割を終えた。その後は孫文や章太炎も、民族主義の課題を排満から「五族共和」へと転換し、漢民族のみならず満州人なども包摂する国民国家の建設を掲げるようになる⁷⁷⁾。こうした民族主義理念の変容にともない、明清交替史への政治的な関心も次第に下火になっていった。辛亥革命以降は、民族主義の宣伝材料としての『漢文本』の意義は低下し、その存在もしだいに忘れられていったようだ。その後の中国では、『漢文本』は明清交替期の稀少な史料を収録する歴史的文献として、少数の歴史学者に注目されるにとどまっていたのである。

[注]

- (1) 林春勝「華夷変態序」(東洋文庫榎一雄編『華夷変態』上, 東方書店, 1981年) 1頁。
- (2) 石原道博『明末清初日本乞師の研究』(富山房,

1945年), 参照。

- (3) 福井保「文化三年丙寅十二月以来新収書目(翻印)」『北の丸——国立公文書館報——』10号, 1978年3月, 36頁。
- (4) この他に島原松平家に伝えられた写本として、『島原松平家本』(37巻)があり、一部『内閣文庫本』にはない風説書も含んでいる。浦廉一「華夷変態解題——唐船風説書の研究」(前掲注(1), 『華夷変態』上) 56-62頁。
- (5) 『通行本』は2種があり、第1種は『内閣文庫本』の最初の5巻の内容とはほぼ同じで、第2種は、第1種本と第4巻までは大同小異であるが、第5巻においては、まったく異なる内容が収録されている。ただし、後述のように、本稿の考察の対象となる『漢文本』には『通行本』の第4巻以降の内容が載録されていない。なお、補訂版『国書総目録』第2巻(岩波書店, 1989年, 43頁)によれば、『通行本』は国立国会図書館・静嘉堂文庫・宮内庁書陵部など14カ所に所蔵されている。
- (6) 前掲注(4), 浦論文, 62-63頁。石原道博氏も,(書評)「東洋文庫叢刊 第十五 林春勝・林信篤編『華夷変態』」(『東洋学報』42巻2号, 1959年9月)105頁において、浦氏の研究に基づき『漢文本』について簡単に論及している。
- (7) 謝国楨『増訂晚明史籍考』上海古籍出版社, 1981年, 992-995頁。
- (8) 孫文『唐船風説書: 文献与歴史——『華夷変態』初探』商務印書館, 2011年, 63-65頁。
- (9) 韓振華「鄭成功時代的對外貿易和對外貿易商」『廈門大学学報(社科版)』1962年第1期, 同「1650-1662年鄭成功時代的海外貿易和海外貿易商的性質」(廈門大学歴史系編『鄭成功研究論文集』上海人民出版社, 1965年), 同「再論鄭成功与海外貿易的關係」『中国社会經濟史研究』1982年第3期。吳鳳斌「鄭芝龍・鄭成功父子僑居日本考略」(『中外關係史論叢2』世界知識出版社,

- 1987年)。林仁川『明末清初私人海上貿易』華東師範大学出版社，1987年。李揚帆「湧動的東亜——明清易代時期東亜政治行為体的身分認同」『國際政治研究』2010年第3期，など。
- (10) 筆者は日本で主要図書館の目録や，全国横断検索システムを利用して『漢文本』の所在を探してみたものの，未だにその所蔵は確認出来ない。中国でも，北京大学図書館・清華大学図書館の所蔵しか確認できない。また，実藤恵秀監修・譚汝謙主編・小川博編輯『中国譯日本書総合目録』（香港中文大学出版社，1980年）は中国語に訳された日本の書籍を網羅的に収めているが，その中に『漢文本』は見当たらない。
- (11) 朱徳蘭「清初遷界令時中国船海上貿易之研究」（中国海洋發展史論文集編輯委員会編『中国海洋發展史論文集(2)』中央研究院三民主義研究所，1986年）105-159頁。
- (12) 神田信夫『清朝史論考』山川出版社，2005年，276頁。真栄平房昭「近世琉球の对中国外交——明清動乱期を中心に」『地方史研究』35巻5号，1985年10月。
- (13) 前掲注(1)，林春勝「華夷変態序」1頁。
- (14) 林春勝「吳鄭論」（『鷲峯林学士文集』上，第48巻，ペリかん社，1997年）510頁。
- (15) 川勝守『日本近世と東アジア世界』吉川弘文館，2000年，245頁。
- (16) 中村質「初期の未刊唐蘭風説書と関連史料——幕府の海外情報管理をめぐって」（田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館，1987年）525-551頁。
- (17) 諏訪春雄「海彼の風説」（諏訪春雄・日野龍夫編『江戸文学と中国』，毎日新聞社，1977年）244頁。
- (18) 林子平『海国兵談』巻1（村岡典嗣校訂，岩波書店，1939年）25頁。
- (19) 真壁仁「徳川儒学思想における明清交替：江戸儒学界における正統の転位とその変遷」『北大法学論集』62巻6号，2012年3月，84頁。
- (20) 近藤重蔵『外蕃通書』第9-10冊（国書刊行会編『近藤正斎全集』第1巻，第一書房，1976年復刻）57-68頁。
- (21) 前掲注(20)，『外蕃通書』第8冊，52頁。
- (22) 前掲注(4)，浦論文56頁によれば，『通行本』が編纂された時期は不明であるが，内藤湖南蔵本が嘉永4（1851）年の奥書をもつという。ただし大阪府立中之島図書館蔵『通行本』は，尾崎雅嘉（1755-1827）が筆写したものとされ，1820年代から『通行本』が流布していたことが分かる。また，『台湾鄭氏紀事』においては，『華夷変態』第5巻以降の関連記事が全く引用されていないので，川口も『通行本』を利用した可能性は極めて大きい。
- (23) 林衡「序」（川口長孺『台湾鄭氏紀事』台湾銀行經濟研究室編印，1958年）1-2頁。
- (24) 青山延于「跋」（前掲『台湾鄭氏紀事』）75頁。
- (25) 柴田光彦・神田正行編『馬琴書簡集成』第2巻，八木書店，2002年，282頁。
- (26) 水野稔「馬琴と『拍案驚奇』」『国文学考』43号，1967年6月，8頁。
- (27) 『外蕃通書』所収の「日本乞師」関係記事は，近藤瓶城編輯「明季交際第七続」（『史料通信叢誌』第8編後，1894年4月，159-165頁），同編輯『改定史籍集覧』21（近藤活版所，1901年，79-92頁）において活字化されている。
- (28) 「日本乞師」に関する初期の代表的な研究として，小倉秀貫「徳川家光支那侵略の企図」（『史学雑誌』2編15号，1891年2月），丸山正彦『台湾開創鄭成功』（嵩山房，1895年，59-66頁），宮崎来城『鄭成功』（大学館，1903年，130-148頁）がある。
- (29) 稲葉君山「明末清初乞師日本始末」（『日本及日本人』572号，1911年12月；『同』574号，1912年1月）。中村孝也『江戸幕府鎖国史論』奉公会，1914年，358-365頁。徳富猪一郎『近世日本国民史・徳川幕府上期・上巻・鎖国篇』民友社，

- 1924年, 503-542頁。
- (30)辻善之助『海外交通史話』東亜堂書房, 1917年, 450-471頁。
- (31)小宮木代良「『明末清初日本乞師』に対する家光政権の対応——正保三年一月十二日付板倉重宗書状の検討を中心として」『九州史学』97号, 1990年5月, 16頁。
- (32)前掲注(4), 浦論文, 62-63頁。
- (33)前掲注(7), 謝著書, 994頁。
- (34)遊佐徹『中国近代文化史研究——時間・空間・表象』岡山大学文学部, 2011年, 35-36頁。
- (35)竹内弘行「清末の私紀年について」『名古屋学院大学論集《人文・自然科学篇》』31巻1号, 1994年7月, 86-87頁。
- (36)本稿においては、『民報』(科学出版社影印, 1957年)を利用するが, 適宜『民報』(中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会, 1969年)の影印本も参照した。
- (37)宋教仁「漢族侵略史」(『貳拾世紀之支那』1号, 1905年6月)42頁には, 「且黄帝君主, 非教主可例。故不如用其即位之年為紀元, 為漢族開国一大紀念也。計自漢族開国元年癸亥自今年乙巳, 都凡四千六百零三年」とある。『民報』の前身である同誌の奥付にも, 「開国紀元四千六百零三年四月廿日印刷」とあり, 「開国紀元」はつまり「黄帝開国紀元」であることを示している。
- (38)前掲注(35), 竹内論文によれば, 黄帝紀年の元年については, ①西暦BC2711年, ②BC2491年, ③BC2698年, ④BC2700年, ⑤BC2748年などの説があった。黄帝紀元4604年は, 西暦では, ①では1893年, ②では2113年, ③では1906年, ④では1904年, ⑤では1856年となる。このうち②と⑤は問題外であり, 日清戦争以前の①とも考えがたい。また④説の初見は1909年であり, 黄帝紀元4604年=1904年にはまだ提唱されていない。
- (39)小島淑男『留日学生の辛亥革命』青木書店, 1989年, 13頁。
- (40)黄克武(青山治世訳)「清末から見た辛亥革命」(辛亥革命百周年記念論集編集委員会編『総合研究辛亥革命』岩波書店, 2012年)91頁。
- (41)桑兵「孫中山与留日学生及同盟会的成立」『中山大学学報(哲社版)』1982年第4期, 44-54頁。
- (42)張静廬・李松年「辛亥革命時期重要報刊作者筆名録」(存萃学社編『近廿年中国史学論著彙編初編 辛亥革命研究論集(1985-1929)第1集』崇文書店, 1971年, 383-410頁)などの資料では, 源光鑑という名前は確認できなかった。なお周知のように, 徳川家は源氏を名乗っており, 林家から幕府に献上された『華夷変態』を刊行するに当たり, 「源」という姓を用いた可能性も想定できるかもしれない。あるいは「史を以て鑑と為す」として, 歴史の源により鑑を明らかにする意を寓したのであろうか。
- (43)さねとうけいしゅう『増補版中国人日本留学史』くろしお出版, 1970年, 61頁。
- (44)前掲注(43), さねとう著書, 325頁。
- (45)本稿では, 主に松本英紀訳注の『宋教仁の日記』(同朋舎出版, 1989年, 以下『日記』と略す)を利用するが, 必要に応じて, 『宋教仁日記』(湖南哲学社会科学研究所古代近代史研究室校註, 湖南人民出版社, 1980年; 以下, 『校注本』と呼ぶ)を参照することとする。なお, 両書では, 「秀光社」と「秀光舎」が併用されている。
- (46)『日記』33頁。
- (47)『日記』34-35頁。
- (48)『日記』43-44頁。
- (49)『日記』99頁。
- (50)『日記』110頁。
- (51)この間, 留学生取締事件に対する同盟会の内部分裂が生じ, その暴露を避けるため宋が敢えて日記を公表しなかったとも考えられる。松本英紀「解題」『日記』532-533頁。
- (52)『日記』119頁。

- 53)『日記』122頁。
- 54)末永節(1869-1965)は福岡市の人、中国革命運動を支援し、同盟会が成立すると機関紙『民報』の発行人の名義を貸した。『日記』437頁。
- 55)これに先だって、秀光社が無断で『民報』を発売するという事件が生じており、印刷者の変更はこの事件と関連していたようである。陳孟堅『民報与辛亥革命(上)』正中書局、1986年、342頁。
- 56)『日記』182・185・195・195頁。松本氏の訳注では、社長の藤澤外吉については未詳と書いている、466頁。なお、『校注本』では、藤澤外吉について、日人、秀光印刷社の主事者(主持人)としている、184頁。
- 57)不肖生『留東外史続集』中国華僑出版社、1998年、664頁。
- 58)『日記』242頁。
- 59)前掲注(4)、浦論文、62-64頁。
- 60)本稿では『通行本』の底本として、尾崎雅嘉が筆写した『華夷変態』(大阪府立中之島図書館蔵、5冊写本)を利用し、『華夷変態』(早稲田大学図書館蔵、5冊写本)を参照した。
- 61)汪精衛「民族的国民」『民報』1号、1905年11月、19頁。
- 62)著名な史料だが、梁啓超「論学日本之益」(1899)、『梁啓超全集』北京出版社、1999年、324頁)を参照。
- 63)馮自由『革命逸史初集』中華書局、1981年、10頁。
- 64)小野川秀美『清末政治思想史研究』みすず書房、1969年、287頁。
- 65)孔祥吉・村田雄二郎『清末中国と日本——宮廷・変法・革命』研文出版、2011年、180頁。
- 66)鄒容「革命軍自序」(島田虔次・小野信爾編『辛亥革命の思想』筑摩書房、1968年)8頁。
- 67)匪石「中国愛国者鄭成功伝」『浙江潮』第2期、1903年2月から連載、台湾文献叢刊67『鄭成功伝』(台湾銀行經濟研究室、1960年)全文収録、65-66頁。
- 68)欧榭甲「新広東」(1902)(張枏・王忍之編『辛亥革命前十年間時論選集』三聯書店、1960年)296頁。
- 69)中村哲夫『同盟の時代——中国同盟会の成立過程の研究』人文書院、1992年。
- 70)狭間直樹「『民報』の六大主義」解説(前掲注(6)、『辛亥革命の思想』)198頁、久保田文次『孫文・辛亥革命と日本人』汲古書院、2011年、129頁、など参照。
- 71)北一輝「支那革命外史」(野村浩一・今井清一解説『北一輝著作集』みすず書房、1959年)23頁。
- 72)前掲注(70)、久保田著書、259頁。また、前川亨「『支那革命外史』から見た中国革命と日本ファシズム——アジア民族主義革命の理想と現実——」『東洋文化研究所紀要』131冊、1996年11月、208-209頁も参照。
- 73)前掲注(70)久保田著書、237-243頁。
- 74)小野信爾「辛亥革命と革命宣伝」(小野川秀美・島田虔次『辛亥革命の研究』筑摩書房、1978年)70頁。
- 75)浴日生「海国英雄記」(『民報』9号、1906年11月、『同』13号、1907年5月)。ただしこの連載は二号だけで未完に終わった。
- 76)永井算巳「民報封禁事件」『東洋学報』55巻3号、1972年12月、41頁。
- 77)黄斌『近代中国知識人のネーション像——章炳麟・梁啓超・孫文のナショナリズム』お茶の水書房、2014年。